

子どもとメディアに関する研究 I 「幼児とテレビ視聴」

— ノーテレビデーの実施と視聴の影響に関する予備実験 —

山 田 真理子

97年のポケモンショックはまだ記憶に新しいが、視聴率を優先するあまり、子どもへの影響についての教育的・心理的・医学的配慮のないまま、子どもの注意を引き付けることを最大の目的として制作されている子ども番組はその後も後を絶たない。大人にとっての適量が、子どもや乳児にとっては致死量になることもあるなどということは、薬物や刺激物の世界ではあたりまえの事であるが、それがテレビやメディア・コンピューターとなると、その光や音刺激が指摘されながらも刺激量についてその危険性は一向に省みられないばかりか、幼児期より情報機器への接触を推し進める政策に見られるように、より多くの量を与えようとさえしているのが現状である。

ノーテレビデーの発想は、4年前の閏年に北九州の小児科医、故伊藤助雄氏が2月29日を「テレビ放送を流さないノーテレビデーにしよう」と訴えた事に端を発している。テレビ局側に訴えたその取組みは、マスコミにも大きく取り上げられながらも残念ながら実施には至らなかった。

一方子どもとテレビの関係については、1970年代後半になって、テレビに子守りをさせるなどの警告が発せられて以来、学校や幼稚園・保育園でも「テレビばかり見せないよう」「時間を区切るよう」「内容によっては見せないよう」「ながら見をさせないよう」など訴えられてきたにも関わらず、決して改善されてはいない。子どものテレビ視聴時間は、NHKの調査でも年々増え、1984年には3～4時間=19%、4時間以上=12%だったものが、1995年にはそれぞれ27%、26%になっている。

さらに、長時間テレビやビデオに接している子どもや同じビデオを繰り返し見ている子どもに、

・叩いたり蹴ったり暴力的な遊びをする、手加減ができない
・落ち着きがなく走りまわる
・自分の思いを大きな声で伝えるのみで、人の話を静かに聞けない
などの行動が目立ってきた（保育園のアンケートより）。幼稚園や保育園でいくら集団あそびや直接体験を重視しても、家に帰ってからの生活がテレビ中心で闘いシーンを多く見ていたのでは、子どもの環境は改善されえない。幼稚園・保育園は地域の子育てセンターとして子育てに必要な支援は惜しまないが、それが家での子育ての手抜きの尻拭いばかりとなっているのでは、真に子どもにとっての支援にはならない。「センターとは発信の場であるはずだ」との思いから、今回の幼稚園・保育園からのノーテレビデー運動の呼び掛けが始まった。

1. 九州大谷幼稚園での実験（2000年2月29日実施）

2000年は奇しくも故伊藤氏が試みた閏年であった。筆者は2月29日にこの取り組みをスタートすることにし、九州大谷幼稚園に呼び掛けた。1月17日に保護者への説明会を行い、2月29日にノーテレビデーを実施した。また子どもの生活時間調査も一緒に行なった。ノーテレビデーに関してのアンケート項目と寄せられた意見は下記の通りである。

①テレビをつけないことに子どもは何か言いましたか？それにはどう答えましたか？

「何もいわなかった」「前日から言っていたのですんなり受け入れた」
「『今日はテレビ入れたらいかんよ』、と子どもから言ってくれた」
「幼稚園とのお約束・大学の先生のアンケートの為というのも、説明しやすかった」

②テレビが見られないと分かった時、子どもは何をしはじめましたか？
トランプ、カード、一人遊び、物語作り、雑誌、絵、工作、マンガ、ブロック、ままごと、ほん、おみせやさんごっこ、人形遊び、かるた、自転車、おりがみ、双六、積み木、新聞（テレビ欄）

③その他、子どもの様子にいつもと違ったことがあれば記入ください。

間がもたないようだった。イライラしていたようだった。遊びに集中していた。

掃除をしていた。朝の支度が早く終わった。

④テレビをつけないですごして、よかったことや困ったことなどがあれば記入ください。

○親子の会話が増えた。幼稚園の様子もいっぱい聞いた。

ゆったりと時間が流れた。1日がとても長く感じた。

ラジオが楽しかった（クラシックを子どもが聴いて、長いので驚いていた）。

静かで、子どもの声がたくさん聞けた。以前見た人形劇の話などまで、話がはずんだ。

早く布団に入っていた。なにをするのもはかどった。穏やかな気持ちですごせた。

親と遊びたいのだとよく分かった。トランプなどが楽しくやれた。この日を境に、テレビを選ぶようになった。テレビを見なくてもすごせると分かった。

×食事の用意の時間が困った。まわりつかれて食事の準備が遅れた。しゃべりすぎて、食事が進まなかった。本をたくさん読まされた。天気予報やニュースが見られなくて困った兄弟に八つ当たりしていた。

核家族、しかも父親は深夜の帰宅。テレビに頼らずにずっと子どもに接する事などできません。

子どもと二人きりでテレビがないと息苦しく感じた。

これは、その後の保育園での継続実験で寄せられる意見とほぼ共通である。

さらに、たった1日の取組みで子どもが親や兄弟（姉妹）との関わりをこんなにも求めていたことに気づき、遊びを自分で工夫する力があることが分かるばかりか、この日をきっかけに親子の会話が増えたり、毎週ノーテレビデーを実施してみるなどの生活変化が生まれ、この呼び掛

けの効果は筆者の予想を超えるものであった。

しかし一方で、子どもが関わってくることを煩わしいと感じ、こどもとの関係が緊張する親や、「テレビがないと会話がない」事を危惧としてでなく「だからノーテレビデーはマイナス」と書いてくる親などに、今の子育ての問題を垣間見る思いがした。

2. U郡保育園連盟の「ノーテレビデー」運動（2000年4月より毎月1日）

U郡保育園連盟の協力により、2000年4月より毎月20日を「ノーテレビデー」として園から呼び掛ける運動が始まった。この運動の目指すところは、テレビを見ないということではなく、テレビを見ない日を作ることにより親子の関係を見直すことと、テレビをはじめとするメディアへの関わりを、「受け身」から「主体的」に変えることである。必要のないものは「見ない」体験から、いけないと思うことはしない・断る勇気へと繋がって欲しいという保育者の願いもあった。

<ノーテレビデーの実施>

実施園：18ヶ園 対象：全園児 約1500名

期間：2000年4月～7月

この運動に関連して実施したアンケートは①「生活調査」（平日・休日各1日のテレビ視聴時間とテレビがついていた時間、テレビゲームの有無、好きな番組）と②「ノーテレビデー」（20日をノーテレビデー（テレビをつけない日・ゲーム類も禁止）として実施し、アンケート（項目は九州大谷幼稚園での実験に同じ）に答える）についての2種類である。

<結果>

4月と7月の子どもの生活時間調査から得られたテレビ視聴時間等は表1の通りである。

表1 テレビを見ていた時間とついていた時間（平日の平均時間）

		5歳児	4歳児	3歳児	未満児
見た時間	4月	2時間19分	2時間9分	1時間59分	1時間37分
	7月	2時間8分	1時間54分	1時間35分	57分
ついていた時間	4月	4時間40分	4時間2分	4時間39分	4時間12分
	7月	4時間36分	4時間44分	3時間12分	2時間30分

ほとんどの年齢で、このノーテレビデーの取組みによって視聴時間・
ついている時間ともに減少したが、年齢が低いほどその割合は大きく、
これは年少児ほどテレビをつけないことに抵抗が少なく適応しやすい事
がうかがわれる。未満児では7月には1時間を切っており、このノーテ
レビデーが継続して実施され、この生活時間が持続されれば、この子ど
も達が5歳児になるころには子どもの時間の使い方が今とは変わるので
はないかと思われる。(実際には7月以降も継続中である。)

アンケート②より

開始当初4月のアンケートでは、よかった事として多かったのは「家
族の会話が増えた」「一緒に遊ぶ時間が増えた」「食事の時間が早く済む」
「時間がゆっくり感じられた」である。これは幼稚園の結果と同様であ
りその後の5月～7月も同様であった。その他、下記のような意見が寄
せられた。「テレビがあると会話でテレビが聞こえないと文句が出るが、
今日はみんなでよく話した。」「日頃気づいていない子どもの成長に気づ
いた。」「いっしょに本を読む事ができ、こどもの言葉の理解力を知るこ
とができた。」「子ども同士でいろいろな遊びを考えだして遊んでいた。」「
いつもならテレビのある部屋でしか遊ばないのに、外に出たり他の部
屋で遊んだりした。」「兄弟姉妹が仲良く遊ぶ。家族が同じ目的でいっしょ
に過ごすことができてよかった。」「食事の手伝いをした。」「早起きがで
き機嫌もよかった。」「音楽が聴けた。」「いつもよりお父さんと遊べた。」「
テレビをつけなければ他の事で遊べるとわかった。」「子どもの話がよ
く聴けた。」「園の事など話してくれた。」「テレビがついているとうるさ
い。」「テレビに子守りをさせていたのが分かった。」「早寝早起きができ
て、時間が増えた気がする。」「相手になってあげるとよろこんでたくさ
んコミュニケーションが取れた。」「テレビがないとよく動く。」「子ども
はそれなりにいろいろ考えついて遊ぶので嬉しい。」

一方、良くなかったという意見では、「情報（ニュースや天気予報）
が分からないで困る」というのがもっとも多く、次いで「家族（祖父母・
父親・兄姉）の協力が難しい」「子どもがつきまとって（夕食などの）
仕事はかどらずに困った」であった。

その他、「親のストレスがたまる。」「時間をもてあます。」「些細なこと

で兄弟喧嘩になる。」「時間感覚がくるって朝の準備が遅くなった。」「家が散らかる。」などの「困った」という意見と、次のような取組み自体への反感が寄せられた。「兄弟（小中学生）にとっては迷惑だ。」「テレビをつけていてもコミュニケーションは取れるのでノーテレビデーなどしなくてよい。」「アニメがいけないという意見には賛成できない。」「会話のない家庭は、テレビのせいではない。」これらについては後述する。

4回目（7月）のアンケートでは、4月と違う面として次のような報告が見られる。

「必要なときだけ見ることの大切さが分かった。」「テレビの良い面、悪い面をこどもとチェックして気づいた。」「子どもがたくさん話してくれた。無口な子だと思っていたのでびっくりした。」「テレビをつけようとすらしない。」「普段からテレビがついていない時間が多くなり、見なくなりました。」「普段もノーテレビタイムを作っている。」「アニメ中心の会話から、今日あったことなどを話してくれるようになった。」「子ども自身にノーテレビデーの自覚ができた。」「テレビ中心から家族中心へ。」「つけないときの方が一杯笑って楽しそう。」

一方で「祖父母が機嫌が悪くなり、部屋から出てこない」「大声で暴れるので近所迷惑」「兄弟喧嘩が増えた。」など、家族の関係が難しくなったり、テレビがないと人間関係を持てない子どもも次第にはっきりしてきた。

3. テレビ視聴の影響に関する予備実験

さて、ここまで実践現場での取組みを紹介してきたが、保護者の中からは「テレビがなぜいけないのか」「テレビが悪いように言うのはおかしい」などの意見も寄せられ、テレビの影響についての幼児を対象にした実験的取組みが必要になった。テレビの視聴が子どもの行動に影響を与えることは体験的に把握はされているものの、保護者への説得力をもったメディアリテラシー教材としてはまだ制作されていない。

筆者は、その予備実験として、保育園の子ども（4～6歳）に3種類のビデオを視聴してもらい、それぞれの視聴中と視聴後の行動を録画した。（これは予備実験であるので結論づけられないが、方向性が示唆さ

れたものと思われる。)

実験期間 2000年10月下旬～11月上旬

実験協力園 U郡U園 (4～6歳・ア組18名、イ組18、ウ組19名)

表2 視聴したビデオとクラス

ビデオ	ビデオの内容	1回目	2回目
A	闘うシーンの多いアニメーション	ア組	イ・ウ組
B	優しさや自然がテーマのアニメーション	イ組	
C	自然(珊瑚の産卵)のドキュメンタリー	ウ組	ア組

(1回目と2回目の間には7～10日の期間がある)

まず1回目で、ア・イ・ウそれぞれのクラスの違いがはっきり見られた。しかし、これがクラスの違いによるのかビデオの違いによるのかは2回目の実験結果を待たなければならなかった。それぞれの状況を表にまとめると表3のようである。(クラスの特徴は担任及び主任保育からの聞き取りである。)

表3 ビデオ視聴後の様子と特徴 アルファベットは表2のビデオ参照

クラス	1回目	2回目	クラスの特徴
ア組	A特に男児は、ブロック取り合いからけんかになることが多く、主人公の動きを真似て他の子どもを倒す子もいる。	Cブロックの取り合いはあるがけんかに発展しない。珊瑚の卵を模倣してか、ぐるぐる回りを楽しむ子が多い。	落ち着きがなくけんかの多いクラス。2回目のビデオ後もけんかがあると担任は予想した。
イ組	B落ち着いて遊んでいる。けんかは1回おこる。	Aブロックの取り合いから投げ合い、けんかが多くおこり、泣く子どもも出てくる。	アとウの中間のクラス。担任も5～6年の経験者。
ウ組	C落ち着いて遊んでいて、全くけんかがおこらない。ブロックの取り合いはあっても自分達で解決。	Aこのビデオを見ても1回目同様、喧嘩をせずに遊んでいる。しかし、描かれ絵は黒を使用する子が増えていた。	担任はベテラン。落ち着いたクラスで、障害児をよくサポートする友達関係ができています。

この2回の実験から見る範囲では、子どもはその直前に見たビデオの内容に大きく影響された行動をすることは明らかであるが、決して日常の人間関係の安定を超えるものではなく、日常保育で落ち着いた関係を作れているクラスにおいてはその影響はほとんど行動としては現れないということが示唆された。

4. 考察とまとめ

<テレビと幼児の関わり方>

1日に3時間以上テレビを見ている子どもが半数をこえる（小学生白書）というが、幼児においても3・4・5歳児では1日のうち約2時間をテレビをみて過ごしているという結果が得られた。しかも今回は保育園であるから、園で過ごす時間は幼稚園よりはるかに長い。つまり家にいる時間は、寝る時間を引くとせいぜい5から6時間であるとする、テレビを見ている2時間はずいぶん大きな割合になる。親は「働いて帰って来てからのわずかな時間、テレビくらい見せて」と言いたいだろうし、「子どもも園で一杯遊んでくるのだから夕方テレビを見てボーッとしてもいいだろう」と言う声を専門家から聴くこともある。しかし、内容を検討することなくこの僅かな親子の関わりの時間をテレビに譲り渡していいわけではない。3の実験において見られたように、子どもの行動は、見るビデオの影響をうけるものであり、それは人間関係がないところで（一人で、親から離れて）見る場合にはなおさらである。「叩いたり蹴ったり暴力的な遊びをする。手加減ができない。落ち着きがなく走りまわる」などの子どもの行動を嘆くなら、影響があると思われるものをチェックしてゆく丁寧な作業が必要であろう。

<ノーテレビデーの効果>

結果の項で述べたように、ノーテレビデーの実施により時間感覚や生活習慣の歪みへの気づき、子どもの時間の過ごし方の違いや新しい能力の発見は多様であった。ノーテレビデーの効果は「やってみてもらえれば子どもの姿から分かります」と言いたいほどである。問題は、やってみようという気持ちを保護者の中にどう呼び起こすかである。そこで、月に1回という提案は、「そのくらいならやれるかもしれない」という

気軽さも手伝って、取り組みやすかった。子どもにとっては、担任から前日に伝えることで気持ちの準備もできるし、他の友達も見ないということは、安心できる気持ちにさせるのか、子どもの方から親に指示することも見られた。「テレビをつけない日はお母さんがぼくの話の聴いてくれるから好き」と言った子どもや話をするときには自分でテレビを消す子ども、テレビの内容をチェックするようになった家族やノーテレビタイムを毎日実施する家庭などたとえ僅かな割合であっても子ども達の生活がテレビに主体性を持って関わるものへと変わるわけであるから、園からのこの取組みの影響は大きいと思われる。

〈ノーテレビデーから見た子育ての課題〉

しかし、一方でこの取組みに対する否定的意見もある。これらの意見には今の子育ての課題が見え隠れしているように思われる。

- ①小学生以上の兄弟がテレビが見られないことに納得せず、親も「兄弟まで見られないのはかわいそう」と判断している家庭がある。つまり、小学生の年令まで、テレビを見たいだけ見て当たり前の生活で育つと、もうノーテレビができなくなってしまうということである。それを危惧を持って受け取れない親は、ノーテレビデーを言ってくる園にその矛先を向ける。この取組みは園のためではない。テレビがないと兄弟喧嘩が増え、暴れ、暇をもてあますだけになってしまう我が子にこそ不安を感じて欲しい。
- ②しつけの問題であるから、園から言われることではないと反論する方もいる。その通りである。皆が言われなくてもやってくれているのなら、いまさら園が言うこともない。そうならないことの尻拭いをさせられるからこのような提案をしているのである。いままでできていなかった家庭が一軒でもこの事をきっかけにしつけに関心をもってくれることを願っての呼び掛けも、このような親には自分が責められたとしか写らないし、自分の所さえできていれば他の家族の事など関心はないのである。このような親が増えている。
- ③祖父母や父親の協力が得られない家庭もある。そうかと思うと、祖父母も会話に加わり、「初めて祖父母の若いときの話をきいた」「父親がこの日とばかりに竹トンボを教えていた」という声もあった。幼い我

